

⑥ 松岡映丘の辭職

昭和十年九月三十日、日本画科教授松岡映丘が辭職した。その退官願いには「病氣ノ為加療長期日ヲ要シ且又一身上難止事情有之退官仕度候ニ付御聽許被成下度此段及御願候也」と記されている。「病氣」というのは、心臓神経症のため同年二月以降欠勤していたが、なお数年間休養加療を要すと診断されたことを指す。「一身上難止事情」というのは、彼が帝国美術院改革（松田改組）に反対し、したがって和田英作校長と対立する立場に立ったことを指すと考えられる。因みに同年六月六日の『東京朝日新聞』および同月十、十一日の『読売新聞』に寄せた彼の論説には改革に対する不審の念が示されている。

映丘の辭職は、その後任をめぐる波瀾が予測されたため、各紙にとり上げられた。その一つ、十月一日の『東京朝日新聞』は、

美校改革へ

松岡氏の後任を銓衡

明治四十一年以來上野の美術學校に教鞭を取つてゐた松岡映丘畫伯は病氣辭任を申出てゐたところ、三十日正式に依願免官の發令を見、後任について和田美術學校長を中心に銓衡中であるが、さきに死去した平福百穂畫伯の補充もないことゝかねてから同校の改革が文部當局をはじめ同校首脳間に考慮されて居り、同時に松岡映丘畫伯も辭任するに際して改革試案たる教官制度（室）の採用方を希望してゐたことからいよ／＼同校の改革も後任選定と同時に行はれるのではないかと見られてゐる、これに關して和田美術學

校長は語る

松岡氏の後任に就いては日本畫科の方とも相談しなければならぬので早急には決定しないと思ふ、又松岡氏の改革希望なども別に私と全然意見の相違を來たしてゐる譯ではないが、兎に角今は何も申し上げるまでに至つてゐない

と報じている。この記事の中の、かねてから本校の改革が文部當局や本校首脳部で考慮されていたという記述や映丘の改革試案云々という記述は、記録が現存していないため具体的に把握できないが、当時の日本画科の生徒による左記の文によつて改革問題の一面を窺うことができる。

美校評壇

日本畫の指導精神と指導方法に就いて。

美術學校に於ける日本畫科の指導方針は諸所に云々（れど）さして來たし又現在も具體的に散見せられる所である。政府筋に又ヂャーナリズムの間に問題になると重大關心の眼をみはるわけだ。この科の指導方針の誤謬缺陷はもう既に常識でわかる所であつて傳統の理解に一關（實）した方針もなく方針どころか四年間勉強して來たが傳統に關しては一際（切）觸れ得なかつた。これは如何なることだと全く憤激すら感じるのである。油繪でも日本畫でも傳統を理解する必要は今さら此處で喋々すべきことではない事だ。洋畫は洋行までして研究しなければならぬのに、全く（日本画は古典がノ欠落也）身近にあつて死蔵する現象を呈してゐる。昭和十一年度に於いて三年級が座談會の方法で

この科に二先生を加へた折方針の更改一新と確立を約束したが、反應は今日に於いてもない。僕は學校は教育する所だと解釋するからこそこう云ふのだ、石膏デッサンも一關した指導方針なく競技と競技の時間を繼ぐ程度で、「」指導はこれだけは洋畫の先生から受る事の方が至當でせう。日本畫各クラスがこの希望である。〔下略〕

〔校友會會報〕第十号。昭和十二年二月

日本画科では昭和八年の平福百穂教授の死去以後、教授の空席が埋まらず、そこに映丘の辭職という事態が重なつたため、後任補充の問題とともに潜在していた教育法改革の問題が大きく浮上してきつたものと思われる。

映丘は辭表提出後直ちに国画院を結成した。新聞はこれを次のように伝えている。

畫壇に新波紋 新民族繪畫運動へ

國畫院結成さる 蓬春、雪岱の十一畫伯參加

松岡映丘氏の宣言

今日の國際的危局に面し社會各方面に於て日本主義なるものが新しい使命を帯びて勃興してゐるが、こゝに畫壇においても帝院改組の後を受けて我が民族精神を近代的に生かさうとする一つの團體が潑刺と誕生した——それは帝展會員の松岡映丘氏を盟主とする舊新興大和繪畫同人が結成した「國畫院」であつて十七日午後五時設立を宣言し異色ある在野展として勇躍第一步を踏み出し

た、盟主松岡映丘氏は廿七年も勤続した東京美術學校教授をも辭めて祖國文化の發展に寄與しようといふ意氣込みで同人はその門下生たる服部有恒、山口蓬春、小村雪岱、吉田秋光、穴山勝堂、岩田正巳、狩野光雅、高木保之助、吉村忠夫氏といふ錚々たる九畫伯、それに遠藤教三、長谷川路可兩氏も准同人として「國畫院」の陣營に馳せ參じ、その顧問に至つては有馬良橋、荒木貞夫、赤星陸治、伊澤多喜男、池田成彬、末次信正、杉榮三郎、徳富猪一郎、鳩山一郎、平沼騏一郎男、細川護立侯、松本丞治、三好重道、柳田國男の十四氏で實に軍部、政界、財界等の巨星を並べた素晴らしい顔觸である、更にこの奈良朝に發して鎌倉時代に隆盛を極めた大和繪の傳統に立脚する新民族繪畫運動には映丘門下の紅日會、瑠爽社の同人約卅人も共鳴して合流する筈であるが「國畫院」の事業としては研究所を設ける外、隨時展覽會を開催し古典の研究に關しては同人、門人以外に洋畫家でも彫刻家、工藝家でもいやしくも主義に同感するの士は誰にでも門戸を開放する方針を採つてをり、來年五月頃第一回の展覽會を開催せんとする「國畫院」の旗擧げは必ずや日本の畫壇に大きな波紋を描かすにはおかないだらう〔下略〕

〔昭和十年九月十八日『中外商業新報』〕

映丘は改組以後の帝展、新文展には出品しなかつたが、昭和十二年帝國芸術院設置の際には會員となつた。国画院は同十二年春に第一回展を開催。映丘は代表作の一つとされる「矢表」その他を出品したが、翌十三年三月二日には満五十六歳で死去してしまつた。